

## 新体操の歴史的変遷と採点規則の変化について

高橋衣代

### 報告にあたって

新体操競技の始まりは、1963年にハンガリーのブタペストで第1回世界新体操選手権大会が行われた。それ以前、新体操はどのように行われていたのであろう。新体操競技のルーツを知り、どのように変化してきたのかを追求したい。更に新体操の歴史的変遷と採点規則が変化することによって競技に及ぼす影響について考え、新体操競技は何を重要としているのか、採点規則の内容も合わせて研究したことを報告する

### 報告の内容

新体操のルーツ、世界選手権大会の歴史は文献資料により研究する。採点規則はFIG（国際体操連盟）採点規則1973年度版1990年度版と1998年度版により比較し、下記の事項について研究する。

1. 新体操のルーツ
2. 世界新体操選手権大会の歴史と変遷
3. 採点規則1973年度版、1990年度版と1998年度版における個人競技の点数配分と構成内容についての比較

### 結果

#### 1. 新体操のルーツ

始めに、体操について考えてみよう。体操は文献によれば、18世紀ごろヨーロッパに広まった体育のひとつの近代形態であると言われている。その名称はグーツムーツが<ギムナスティークGymnastik>

というドイツ語を使用したのがはじまりである。この名称の由来は古代ギリシャに源がある。古代ギリシャ語のギムナスgymnos（裸体の、軽装の）という形容詞にテクネーtechne（技術）という語がつけ加えられて作られたギムナスティケーgymnastikeがその語源と言われている。古代ギリシャにおけるギムナスティケーは、裸体で身体を訓練する技術を意味していた<sup>1)</sup>。身体訓練の意図のもとに意識的に行う運動方法である。古代ギリシャ人はスポーツを愛好し、調和のとれた美しい身体を理想とする美意識をもっていた<sup>2)</sup>。この点は単にスポーツを愛好するだけでなく、芸術的価値観が、スポーツの中に生かされていたのではなかろうか。私は、この古代ギリシャ人のスポーツを愛好する事によって、調和のとれた美しい身体を理想とする美意識と芸術的価値観は、現在の新体操の価値観においても共通する因子であろうと考える。ギムナスティケーは、走、跳、投等の陸上競技的要素の運動とレスリング、ボクシングなどの格闘技がおもな内容であった。現代の体操より広範囲の運動を扱っていたGymnasticsという術語は競技的スポーツよりも広義に解せられ、「体育」の意味に使用されていた。FIGでは、体操の目的を次のように明記している。「体操」という「合理的な身体諸運動」の実践を通じて、男女体操家の身体的道徳的な発達に尽力することでありと（第1目的）されている。従ってパリの第2回オリンピック大会で体操の種目に高跳び、幅跳び、綱引きなどの種目が加えられ「混合競技」が採用されていた<sup>1-14頁</sup>。ただ1つのスポーツ種目を競うだけでは身体の調和的な発達は実現できないという考えによるものである。また、技術の勝敗だけに集中することは偏向した人間を作るといった思想があっ

た。この思想は、他のスポーツ団体と違って、F I Gに体操的な世界観と教育観を意識させていった。18世紀の後半になると、ヨーロッパ各国の体操クラブは地区的な団体を作り、全国的な組織へ発展していく。体操連盟を組織化したのはドイツが最も早く1860年で第1回の「ツルンフェスト」が挙行されこの時、体操の全国組織が結成された。この体操祭には、徒手体操や器械体操の実演会や競技会が行われた。体操以外の各種の競技も行われた。その後、ベルギー、オランダ、フランス等の国々が体操連盟を結成していった<sup>4)</sup>。1881年にはF.I.G (Federation International Gymnastic) 国際体操連盟発足。当時はヨーロッパ体操連盟 (F.E.G) であった。1921年、FIGに改称した。

日本ではく体操の語が使われたのは幕末期で1841年高島秋帆が洋式調練を実演し、この訓練の初歩的段階に体操が実施された。これが器械体操や陸上競技の原型であったといえる<sup>5)</sup>。

1868年福澤諭吉がく西洋事情で身体を健康を保つ運動場のある事を紹介し1868年以降、慶応義塾で保健体育を奨励した。

1874年に陸軍戸山学校 (陸軍体育学校) で、フランスからデュクロ (F.J.Ducros) を招いて体操の教官としている。1887年になると課外の部活動として器械体操が行われるようになる。慶応義塾の体育会に器械体操部が設立されたのは1892年である<sup>1-12頁)</sup>。

新体操のルーツについて考えてみよう。まず、新体操の特徴として手具を使用することが挙げられる。女性用手具体操の歴史は古いがヨーロッパでは1920年代にドイツを中心に「体操改革運動」が起り、第1次世界大戦後、新しい思想や運動となっていった。1922年にはベルリンにおける「芸術的な身体運動に関する会議」で新体操の方向が確認され、1925年にはドイツ体操連盟のもとに新体操の原動力となりやがてヨーロッパ諸国に普及していった<sup>3)</sup>。

ドイツのメダウ (H.Medau) はリズム体操を学び、体操の中にいろいろな手具 (ボール、こん棒、なわ、タンバリンなど) を持ち込み手具体操の体系化を図った、手具とは、手に持って運動出来る道具を意味し、ボール、こん棒、なわ、リボン、輪等多くの種

類がある。

1929年にはベルリンにメダウ学校を建設し、体操くModern Gymnasticsの指導者養成に取り組んだ。体操の中に手具を取り入れ、手具体操の基盤を作ったメダウの体操、モダンギムナスティックは現在新体操と呼ばれている違いがあるが内容は共通している。ヨーロッパにおける他の国についてみると、旧ソビエトでは1930年代芸術体操と呼ばれ1945年新体操という名称が誕生した。1949年には第1回ソビエト選手権大会が行われ、1954年手具が決められ、なわ、輪、ボール、リボンが行われ、遅れてこん棒が加えられ、現在と同じ5種目となった。同時に身体的技術統一のため、手具なしの徒手の規定演技も行われた<sup>4)</sup>。

ブルガリアでは、1952年に新体操共和国競技会が開催され、これを“新体操競技誕生の日”、としている。それ以前にも体育大学で手具を使用していた。このようにヨーロッパにおいて競技会が行われていった。

1951年くモダン体操という概念が正式に承認を受けく国際モダン体操連盟が発足した。日本でく新体操競技と呼んでいる新体操とはくModern Gymnasticsのことを意味し、メダウの言うくモダン体操と同義であると言われている。

日本での新体操の始まりは、1878年く体操伝習所>が設立されこの時教授として招聘されたリーランド (G.A.Leland) は軽体操 (普通体操) を指導したこの内容が徒手体操と亜鈴や球竿、棍棒などの手具体操であった。これが新体操の原型であろうと思われる。

学校に於いては、旧来の形式体操から脱皮し、自然思想に基づく新しい体操即ちリズム体操に目を向けるようになった。それを逸早く導入したのが現在の東京女子体育大学の前身東京体操音楽学校であった。校長の藤村トヨは、1928年欧米の体育視察に出かけ、ドイツの自然の動きを尊重する体操に魅せられた。帰国後、ドイツの自然運動を取り入れ、リズム太鼓を使用して実際に行った。再度ドイツに留学、更に、ベルリン大学からワルター (体操) ブラント (ダンス) の両女史を迎え、自然運動の理解と普及

につとめた。とくに女子には腹と腰の力が必要であるという観点からドイツより木製の平行棒と鞍馬を取り寄せ指導した<sup>1-83頁</sup>。これが日本女子の体操競技の芽生えである。

新体操の名称については、日本では団体徒手体操と言われていた1946年日本体操協会が設立された。1949年には国民体育大会で新体操の団体徒手が行われ1968年全日本学生体操競技連盟は団体体操の名称を「新体操」個人競技が入ることによりと改称し現在に至っている。

F I Gは、新体操の名称を1973年Modern Sportire Gymnasticsとした。1977年Rhythmic Sportive Gymnastics。1998年にはRhythmic Gymnasticsとした。

## 2. 世界新体操選手権大会の歴史と変遷

世界大会としての新体操のはじまりについては、1950年第12回世界体操競技選手権大会のとき、体操競技の1種目として手具を持って行う音楽伴奏の団体演技が手具体操のはじまりと言われている。しかし、これは採点や運営上の問題から1956年第16回メルボルンオリンピックを最後に中止となった。そして、1963年にハンガリーのブタペストで第1回世界新体操選手権大会開催となり現在へ至る<sup>1-145頁</sup>。日本の新体操が世界に進出したのは1969年のバルナ大会であるから体操から比較すると37年遅れての参加となる。オリンピックは、1984年の大会で初めて新体操の種目を取り入れられた。同じロサンゼルスのものであるが52年後の大会である。このように体操競技と比較し新体操の歴史は浅いが、世界選手権大会への参加、そしてオリンピックへの種目が決定された事により、多くの人々に新体操が知られるようになった。また、世界の各国と競技する事により、日本の新体操の競技力は次第に向上し、各地に新体操愛好者、競技者を増加させ、新体操の発展に結びついていったと考えられる。

世界新体操選手権大会は第1回、第2回までは個人総合競技のみが行われ、団体競技は第3回1967年コペンハーゲンの時初めて行われた。

第1回は旧ソビエトのスカピンコワ選手が優勝、第2回は旧チェコスロバキアのみセコバ選手が優勝

している。1975年共産主義国不参加の大会で旧西ドイツのリツシャー選手が優勝したがその他の大会では、旧ソビエトとブルガリアが優勝している。1998年までに旧ソビエトは8回、ブルガリア8回で同様に優勝している。西ドイツ1回、チェコスロバキア1回、ソビエト崩壊後ウクライナ1回となっている。

共産国不参加やドイツ、チェコスロバキア、旧ソ連の国の変化が世界新体操選手権にも、変化をもたらしたことがわかる。

現ロシアとブルガリアは、同数の優勝で世界を制覇し歴史のある国が世界で優秀な成果を残していることがわかる。

日本は1969年第4回ブルガリアのバルナ大会に初参加した。この時日本の団体は初参加であったが、第5位の成績であった。個人は種目別のみの出場であった。1971年、キューバのバハナ大会から個人総合に参加し団体とともに個人競技も参加した。

日本は1969年第4回世界新体操選手権大会（バルナ）で団体初参加ではあるが5位の成績をとっている。

1971年第5回世界新体操選手権大会（ハバナ）で個人総合初参加し21位、団体5位でこの大会から団体、個人総合共に参加している。1975年世界新体操選手権大会（マドリット）で共産国不参加により個人で森野容子選手が8位の成績をとっている。

オリンピックへの参加は、1984年オリンピックロサンゼルス大会に個人競技のみが正式種目となった。

この大会に日本から山崎浩子選手、秋山エリカ選手が出場している。この時共産国不参加で、カナダのロリーファン選手が優勝した。日本は山崎浩子選手8位、秋山エリカ選手13位であった。その後、オリンピックに団体種目も加わったのは、1996年アトランタ大会からでこの大会から団体と個人の両種目が行われるようになった。この大会は日本の団体は出場資格がとれず個人のみが参加した。

## 3. 採点規則1973年度版、1990年度版、1998年度版個人競技における個人競技の点数配分と構成内容についての比較

今回は個人競技について比較してみよう。

表1 FIG (国際体操連盟) 発足と新体操競技会の歴史

1881年	FIG (Federation International Gymnastics) 国際体操連盟発足当時ヨーロッパ体操連盟 (FEG)であった。
1921年	FIGに改称された。
1952年	FIG総会開会、新体操もこの中に含まれていた。
1954年	技術委員会設立 (手具の決定: なわ、輪、ボール、リボン、その後こん棒が加えられ5種目) 同時に手具なしの徒手の規定も行われた。
1930年	全日本体操連盟設立
1940年	オリンピックは第2次世界大戦の為に中止
1944年	同上
1949年	国民体育大会で新体操の団体徒手が行われた。
1950年	FIG総会で日本体操協会国際復帰。
1958年	第1回全日本体操学生選手権大会開催。
1967年	デンマークの第3回世界選手権大会を日本から視察。
1968年	全日本新体操学生選手権大会開催、個人競技として徒手となわの2種目が行われた。
1963年	第1回世界新体操選手権大会。 (ブタベスト・ハンガリー) 個人競技のみ
1965年	第2回世界新体操選手権大会。 (プラハ・チェコ) 個人競技のみ
1967年	第3回から団体演技も加わった。 (個人と団体競技により2年毎に開催された)
1969年	第4回から日本参加。 (団体競技参加。個人競技種目別参加)
1971年	第5回から日本は団体総合と個人総合競技参加
1984年	オリンピックロサンゼルス大会 個人競技初参加
1988年	オリンピックソウル大会 個人競技参加
1992年	オリンピックバルセロナ大会 個人競技参加
1994年	オリンピックアトランタ大会。 個人競技、団体競技 初参加 (日本は個人競技のみ参加)

(FIGブリテンに基づき執筆で作成)

1973年には、個人の種目の中に、徒手体操が行われていた。この点は1980、1998年と大きく異なる点であろう。現在新体操競技の特徴は手具を使用する事が挙げられるが、初めは徒手という手具を使用しない演技があった。更に、手具体操として、現在と同様のボール、なわ、輪、带状布、こん棒その他となって手具も使用されていた。1990年、1998年は共に、なわ、輪、ボール、こん棒、リボンの中から4手具の合計で個人総合が行われていた。1990年競技Iから競技IIIまであり、競技Iの国別競技の上位26位の選手が個人総合に出場出来る。但し各国2名以内とするという事は、多くの国から個人総合に出場出来るようにという理由によるものである。1998年には、競技I～第V競技までであるようになった。

競技の国別競技で30位までの選手が個人総合に参加できるように変化した。そして国別競技決勝競技

表2 世界新体操選手権大会、開催地、開催年

1963年	第1回	ブタベスト大会 (ハンガリー)
1965年	第2回	プラハ大会 (チェコスロバキア)
1967年	第3回	コペンハーゲン大会 (デンマーク)
1969年	第4回	バルナ大会 (ブルガリア)
1971年	第5回	ハバナ大会 (キューバ)
1973年	第6回	ロッテルダム大会 (オランダ)
1975年	第7回	マドリード大会 (スペイン)
1977年	第8回	バーゼル大会 (スイス)
1979年	第9回	ロンドン大会 (イギリス)
1981年	第10回	ミュンヘン (西ドイツ)
1983年	第11回	ストラズブル大会 (フランス)
1985年	第12回	バリャドリッド大会 (スペイン)
1987年	第13回	バルナ大会 (ブルガリア)
1989年	第14回	サラエボ大会 (ユーゴスラビア)
1991年	第15回	アテネ大会 (ギリシャ)
1992年	第16回	ブリュッセル大会 (ベルギー)
1993年	第17回	アリカンテ大会 (スペイン)
1994年	第18回	パリ大会 (フランス)
1995年	第19回	ウィーン大会 (オーストラリア)
1996年	第20回	ブタベスト大会 (ハンガリー)
1997年	第21回	ベルリン (ドイツ)
1998年	第22回	セビリア大会 (スペイン)
1999年	第23回	大阪大会 (日本)

(FIGブリテンに基づき執筆で作成)

があり試合数が増加している。

種目別決勝競技が上位8位の選手で行われるのは変化していない。

### 1) 構成内容と得点配分について

次に構成内容、得点配分について考えてみよう。

この難度及び構成内容、配分が大きく変化している。まず1973年は、構成内容は難度要素、独創性および技術価値、伴奏と演技との関係の3点により計7.00点、実施が3.00点である。10点の中に構成内容が含まれる点と、ボーナス加点がなかった事が大きな差異である<sup>6)</sup>。

1990年には、構成内容が構成の技術的価値、多様性、音楽と動きの関係に分かれそれぞれの内容が詳しく示され、多くの要求が成されるようになった。

表3 世界新体操選手権大会記録 個人競技記録(個人総合)

回	開催年・開催地	個人総合		日本成績	
1	1963 ブタベスト	1 スズビツコリ 2 クラフトチェンコ 3 トラジリハ	ソビエト連邦 ソビエト連邦 ブルガリア		
2	1965 プラハ	1 ミヅハ 2 クラフトチェンコ 3 マサハ	チェコスロバキア ソビエト連邦 チェコスロバキア		
3	1967 コペンハーゲン	1 カルマ 2 レマン 3 セラ	ソビエト連邦 東ドイツ ソビエト連邦		
4	1969 バルナ	1 キコ 2 マハ 2 セラ 2 シュグロハ	ブルガリア ブルガリア ソビエト連邦 ソビエト連邦	日本初参加 (個人総合は不出場)	
5	1971 ハバナ	1 キコ 2 カルマ 3 ナミエ(イ)	ブルガリア ソビエト連邦 ソビエト連邦	・川向 妙子 ・五明 みさ子 ・小林 衣代	21位 22位 23位
6	1973 ロッテルダム	1 シュグロハ 1 キコ 3 クラシコハ	ソビエト連邦 ブルガリア ソビエト連邦	・小林 衣代 ・黒川 美智代 ・丸物 幸子	17位 19位 26位
7	1975 マドリッド	1 リッジー 2 ローゼンバーク 3 アルゲレ	西ドイツ 西ドイツ スペイン	・森野 容子 ・高力 美登里 ・平口 美鶴	5位 8位 9位
8	1977 バーゼル	1 テルキナ 2 シュグロハ 3 キコ	ソビエト連邦 ソビエト連邦 ブルガリア	・荒尾 三和子 ・麓 久美子 ・小林 由美子	14位 15位 18位
9	1979 ロンドン	1 テルキナ 2 トーマス 3 カバシ	ソビエト連邦 ソビエト連邦 ソビエト連邦	・鶴木 秀子 ・麓 久美子 ・山崎 浩子	9位 12位 20位
10	1981 ミュンヘン	1 ランコハ 2 ラハ 2 イナハ	ブルガリア ブルガリア ブルガリア	・木村 貴美枝 ・山崎 浩子 ・太田 倫代	11位 12位 22位
11	1983 ストラスブール	1 キルキハ 2 イナハ 2 ハクラー 2 ランコハ	ブルガリア ブルガリア ソビエト連邦 ブルガリア	・秋山 エリカ ・山崎 浩子 ・大塚 裕子	27位 34位 75位
12	1985 バリャドリッド	1 キルキハ 2 イナハ 3 ハンハ	ブルガリア ブルガリア ブルガリア	・大塚 裕子 ・秋山 エリカ ・浜田 桂子	19位 30位 35位
13	1987 バルナ	1 ハハ 2 イナハ 2 トナスカ	ブルガリア ブルガリア ブルガリア	・秋山 エリカ ・藤野 朱美 ・大塚 裕子	16位 39位 43位
14	1989 サラエボ	1 ティモシェンコ 2 ハハ 3 トナスカ 3 スカリエ	ソビエト連邦 ブルガリア ブルガリア ソビエト連邦	・秋山 エリカ ・川本 ゆかり ・藤野 朱美	8位 41位 42位
15	1991 アテネ	1 スカリエ 2 ティモシェンコ 3 マリハ	ソビエト連邦 ソビエト連邦 ブルガリア	・川本 ゆかり ・大久保 智美 ・藤野 朱美	23位 43位 46位
16	1992 ブリュッセル	1 コステイ 2 ハトハ 3 ルキヤネコ	ロシア ブルガリア ベラルーシ	・川本 ゆかり ・大久保 智美	16位 24位
17	1993 アリカンテ	1 ハトハ 2 セリアス 3 サリハ	ブルガリア ウクライナ ロシア	・山田 海峰 ・川本 ゆかり	14位 15位
18	1994 パリ	1 ハトハ 2 サリハ 2 ルキヤネコ	ブルガリア ロシア ベラルーシ	・山尾 朱子 ・田原 麗子	21位 32位
19	1995 ウィーン	1 ハトハ 1 セリアス 3 ルキヤネコ 3 ハテリナ	ブルガリア ウクライナ ベラルーシ ロシア	・山田 海峰 ・山尾 朱子	19位 24位
20	1996 ブタベスト	*個人種目なし			
21	1997 ベルリン	1 ビトリチェンコ 2 リアゴフスカ 3 ハテリナ	ウクライナ ロシア ロシア	・松永 里絵子 ・村田 由香里	18位 19位
22	1998 セビリア	*個人種目なし			
23	1999 大阪	1 カハ 2 スカ 3 ハルサハ	ロシア ベラルーシ ロシア	・松永 里絵子 ・横地 愛	10位 22位

(FIGブリテンに基づき執筆者作成)

表4 世界新体操選手権大会記録

団体競技記録(団体総合)

回	開催年・開催地	団体総合			日本成績
1	1963 ブタベスト				
2	1965 プラハ				
3	1967 コペンハーゲン	1 ソビエト連邦 2 チェコスロバキア 3 ブルガリア	<フープ6>		
4	1969 バルナ	1 ブルガリア 2 ソビエト連邦 3 チェコスロバキア	<ボール6>		日本初参加 ● 団体総合 5位
5	1971 ハバナ	1 ブルガリア 2 ソビエト連邦 3 イタリア	<フープ3、ボール3>		● 団体総合 5位
6	1973 ロッテルダム	1 ソビエト連邦 2 チェコスロバキア 3 東ドイツ	<ロープ6>		● 団体総合 7位
7	1975 マドリッド	1 イタリア 2 日本 3 スペイン	<ロープ3、ボール3>		● 団体総合 2位
8	1977 バーゼル	1 ソビエト連邦 2 チェコスロバキア 3 ブルガリア	<クラブ6>		● 団体総合 4位
9	1979 ロンドン	1 ソビエト連邦 2 チェコスロバキア 3 ブルガリア	<フープ6>		● 団体総合 4位
10	1981 ミュンヘン	1 ブルガリア 2 ソビエト連邦 3 チェコスロバキア	<リボン3、ボール3>		● 団体総合 4位
11	1983 ストラスブール	1 ブルガリア 2 ソビエト連邦 3 朝鮮民主主義人民共和国	<ロープ3、フープ3>		● 団体総合 7位
12	1985 バリアドリッド	1 ブルガリア 2 ソビエト連邦 3 朝鮮民主主義人民共和国	<フープ3、ボール3>		● 団体総合 6位
			<クラブ6>	<フープ3、ボール3>	
13	1987 バルナ	1 ブルガリア 2 ソビエト連邦 3 中華人民共和国	1 ブルガリア 2 ソビエト連邦 3 中華人民共和国	1 ブルガリア 2 中華人民共和国 3 スペイン	● 団体総合 5位
			<クラブ6>	<フープ3、ボール3>	
14	1989 サラエボ	1 ブルガリア 2 ソビエト連邦 3 スペイン	1 ブルガリア 2 ソビエト連邦 3 スペイン	1 ソビエト連邦 2 ブルガリア 3 スペイン	● 団体総合 6位
			<リボン6>	<ボール3、ロープ3>	
15	1991 アテネ	1 スペイン 2 ソビエト連邦 3 朝鮮民主主義人民共和国	1 ソビエト連邦 2 ブルガリア 2 スペイン	1 ソビエト連邦 2 スペイン 3 朝鮮民主主義人民共和国	● 団体総合 6位
			<リボン6>	<ボール3、ロープ3>	
16	1992 ブリュッセル	1 ロシア 2 スペイン 3 朝鮮民主主義人民共和国	1 ロシア 2 イタリア 3 スペイン	1 ロシア 2 ウクライナ 3 イタリア	● 団体総合 9位
17	1993 アリカンテ	個人競技のみ行われました。			
			<ロープ6>	<フープ4、クラブ2>	
18	1994 パリ	1 ロシア 2 スペイン 3 ブルガリア	1 ロシア 2 ブルガリア 3 スペイン	1 ブルガリア 2 ロシア 3 スペイン	● 団体総合 5位
			<ボール3、リボン2>	<フープ5>	
19	1995 ウィーン	1 ブルガリア 2 スペイン 3 ベラルーシ	1 スペイン 2 ブルガリア 3 ロシア	1 ブルガリア 2 スペイン 3 ベラルーシ	● 団体総合 10位
			<ボール3、リボン2>	<フープ5>	
20	1996 ブタベスト	1 ブルガリア 2 スペイン 3 ベラルーシ	1 スペイン 2 ロシア 3 ベラルーシ	1 スペイン 2 ベラルーシ 3 ウクライナ	● 団体総合 6位
21	1997 ベルリン	個人競技のみ行われました。			
			<ボール5>	<フープ2、リボン3>	
22	1998 セビリア	1 ベラルーシ 2 スペイン 3 ロシア	1 ロシア 2 ベラルーシ 3 ウクライナ	1 スペイン 2 ベラルーシ 3 ウクライナ	● 団体総合 8位
			<クラブ>	<フープ2、リボン3>	
23	1999 大阪	1 ロシア 2 ギリシャ 3 ベラルーシ	1 ロシア 2 ギリシャ 3 ベラルーシ	1 ロシア 1 ギリシャ 1 ベラルーシ	● 団体総合 4位

(FIGリテンに基づき執筆著作作成)

表5 オリンピック競技記録

1984年 第23回 ロサンゼルス大会 <アメリカ合衆国>			
団体総合	個人総合		日本人成績
個人競技のみ行われた	1. ファン	カナダ	<個人総合>
	2. スタイクレスク	ルーマニア	山崎 浩子 8位
	3. ウェーパー	西ドイツ	秋山 エリカ 13位

1988年 第24回 ソウル大会 <大韓民国>			
団体総合	個人総合		日本人成績
個人競技のみ行われた	1. ロバチ	ソビエト連邦	<個人総合>
	2. ドナフスカ	ブルガリア	秋山 エリカ 15位
	3. ティモシエンコ	ソビエト連邦	大塚 裕子 27位

1992年 第25回 バロセロナ大会 <スペイン>			
団体総合	個人総合		日本人成績
個人競技のみ行われた	1. ティモシエンコ	ソビエト連邦合同チーム	<個人総合>
	2. パスカル	スペイン	山田 海峰 19位
	3. スカルディナ	ソビエト連邦合同チーム	川本 ゆかり 37位

1996年 第26回 アトランタ大会 <アメリカ合衆国>			
団体総合	個人総合		日本人成績
1. スペイン	1. セレブリアンスカヤ	ウクライナ	<個人総合>
2. ブルガリア	2. バテリシナ	ロシア	山尾 朱子 18位
3. ロシア	3. ビトリチェンコ	ウクライナ	山田 海峰 20位

(FIGブリテンに基づき執筆者作成)

実施において、ボーナス点という加点があらわれたことは大きな変化である。今まで減点方法であったが、加点が取り入れられ、熟練度、独創度、リスクに対しボーナス加点が与えられるようになった。非常に高い技術的完成度、ゆとり、表現力などに0.20のボーナス点、独創的な難度や組み合わせに合計0.20のボーナス点、更に、手具との関連によるリスクに0.10点のボーナス点を与えるようになった<sup>7)</sup>。この採点規則の変化は技術を向上させ、また新しい難度の開発等、技術の工夫や発展に役立った。リスクにより、演技にスピード感が出てきて、スリルのある難しい技術等が登場するようになった。

構成の技術の中に必須の徒手の要素を伴う高級難度という要求がある。これは、徒手の内容を必須の内容を定めることで徒手能力のレベルアップがなされたといえる。しかし、一方で難度の追求に走り、芸術的価値が失われないよう多様性が要求された。また、多様性の要求は、徒手要素、手具要素において、片よりをなくし、バランスの良い構成がなされる重要な要因であることがわかる。多様性は、ダイナミズム（力動感）においても、空間使用において

も要求されている。音楽についても、動きと音楽の調和等について重要視されている。

1998年については、構成点の中が技術的価値と芸術的価値と分かれ、細かく内容が要求されている。構成で10点満点、実施で10点で合計20点となった<sup>8)</sup>。ここで、構成と実施が同等に扱われ、両方が平等に重要視されてきた。これまで実施の価値を示す点が少なかった事が改正され構成内容と共に、実施内容における価値が重要視された。

技術的に難度の数が増加し、レベルも、A、B、C、Dまで4段階となった。追加の難度数とレベルにより得点が高くなるように変化してきた。選手の技術のレベルが高くなり、難度の段階が増えた難度の組み合わせ方法も高度の技術が必要とされた。

芸術的価値は、手具要素の選択と徒手の身体要素の選択と多様性として要求されている。

ボーナス加点としては、振り付けの独創性、音楽、制御力が0.30のボーナス点が与えられるようになった。実施のボーナス点は、表現力熟練度により0.30のボーナス加点が与えられている。

## 2) 難度要素について

構成内容の中難度について比較してみよう。

表6 個人競技の内容(1973年、1990年、1998年の採点規則)

年度	競技内容	
1973年	個人総合	徒手体操・手具体操 (ボール、なわ、輪、带状布、こん棒、その他)
1990年	競技Ⅰ	チーム対抗競技 なわ、輪、ボール、こん棒、リボン各国3名の得点合計(120点満点)により決定される。
	競技Ⅱ	個人総合競技 競技Ⅰで上位26位まで、ただし各国2名以内とする。 1人4演技により個人総合競技が行われる。
	競技Ⅲ	競技Ⅰにおける各種目で上位8位までの選手、但し各国2名以内とする。種目別得点のみで決定される。(10点満点)
1998年	競技Ⅰ	国別対抗：個人総合予選 (12演技中10演技の合計)
	競技Ⅱ	個人総合競技 競技Ⅰで1位～30位の選手 (各国2名以内)
	競技Ⅲ	種目別決勝競技 競技Ⅱの各種目で上位8位までの選手(各国2名以内)
	競技Ⅳ	国別対抗決勝

(1973年度・1990年度・1998年度の採点規定に基づき執筆著作成)

## 3) 徒手の難度について

1973年では、中級難度、高級難度の2つに分かれている。文章では述べられ図解がなく理解しにくい。難度の運動名も波動運動、曲げる、回転等になっている。徒手の内容は平均運動、体を曲げる動作回転、跳躍、姿勢、(静止運動)となっている。従って、こ

の時すでに、平均(バランス)、体を曲げる(柔軟)跳躍(ジャンプ)等が入れられ重要視されていることがわかる。難易度は1990年代に比べて単純であり、レベルは低いが内容はバランスが良いと考える。

1990年では、高級難度4個、中級難度4個が要求されている。更に、高級難度は、ジャンプ、ピボット、バランス、その他要素群からの選択となっている。1973年に比べ、徒手の内容が明確に示され、バランスの良い難度構成となっている。また左手での高級難度が要求され、左右の手の使用が難度により行われなければならない事が1973年と異なる。徒手の内容と共にレベルが上がっている。

1998年では、難度のレベルがAからDまでの4段階あることが大きく変化している。ジャンプ、ピボット、バランス、柔軟がそれぞれ図示され、明確で理解しやすくなっている。

それぞれの徒手能力の向上、技術の高さがよく理解できる。これは、選手達の徒手能力の向上がこの様なルールの変化につながったと考えられる。特に脚の開脚の度合がジャンプで180度以上要求され、更に上体の運動を伴う難度要素が要求されている。バランスにおいては、挙げる脚の高さ(角度)が決められており、軸足のかかと上げる等難しい要求がある。ピボットも身体の形、回転数等、高度に変化してきている。難度に、A+B、B+B等コンビネーションが加わっていることが大きく変化している点である。1つの難度を正確に実施する事も難しいが、2つを組み合わせるのは、高度な技術を必要とする。また手具を伴うので、手具操作の巧みさ、手具操作と徒手の調和等、高い技術、運動能力が必要である。これらの採点規則の変化は構成における多様性や変化をもたらす要因であろう。



表 7-1 1973年 演技構成内容と得点配分

・演技は0から10点および1/10点で採点し、次のように配点する。

演技	構成	難度要素の価値	5.00	
		独創性および技術価値	1.00	
		伴奏と演技との関係	1.00	
			計	7.00
	実施	演技の正確性と安定性	1.50	
一般印象		1.50		
		計	3.00	

(1973年度版採点規則より抜粋)

表 7-2 1990年 構成内容得点配分

<b>A. 構成</b>		技術的価値・多様性・音楽(T・V・M)・・・6.4点満点
①	構成の技術的価値	を伴って実施される高級難度 の要素群の存在 の3つの徒手要素の存在 の技術的要求の存在 の配分 の連携 の使用
	・難度の数とレベル	
	・必須の徒手要素群の存在	
	・各手具に特有の技術的要求の存在	
	・各手具に特有の3つの徒手要素の存在	
	・難度の演技全体への配分	
	・難度要素の論理的連携	
	・演技面全体の使用	
②	多様性	
	・諸要素の選択(徒手要素と手具要素)	
	・ダイナミズム(力動感)において	
	・空間の使用において	
③	音楽：音楽と動きの関係	構成造について のダイナミックなコントラストについて の強弱の変化について
	・動きと音楽のダイナミックなコントラストについて	
	・動きと音楽の強弱の変化について	
<b>B. 実施</b>		・・・3.00点満点
①	手具操作の技術	・・・0.20点満点
②	徒手の動きの技術	
③	リズムの実施(音楽と動き)	
<b>C. ボーナス(V.O.R)</b>		・・・0.60点満点
①	熟練度(Virtuosity)	・・・0.20点満点
	・非常に高い難度要素の実	
	・技術的完成度	
	・並外れた大きさ	
	・実施における確実さ	
	・完璧なゆとり	
②	独創性(Originality)	・・・0.10点満点
	・独立した新しい難度	
	・組み合わせ	・・・0.10点満点
③	リスク(Risk)	・・・0.20点満点
	・手具との関連によるリスク	
合計		・・・10.00点満点

(1990年度版採点規則より抜粋)

表 7-3 1998年 構成内容得点内容

<b>5-3 点数の配分</b>	
5-3-1 構成点	
A1 - 技術的価値 V.T	
1. 一般的な要求	
	- 出発点、4つの単独の基礎B難度 2.00点
	- 追加の難度数とレベル(最高8つ)
	最高 3.00点
	技術的価値の合計：最高 5.00点
A2 - 芸術的価値 V.A	
1. 一般的な要求	
	振り付け
	- 演技の統一性
	- 左右の手の使用の均衡
	- 手具要素の選択と多様性
	- 身体要素の選択と多様性
	- アクロバット要素
	- 構成の多様性
	- 演技面の使用
	伴奏音楽
	2. ボーナス加点
	- 振り付けの独創性 0.10点
	- 音楽 0.10点
	- 制御力 0.10点
	芸術的価値合計：最高 5.00点
5-3-2 構成の最終得点	
	技術的価値+芸術的価値
	構成合計：最高 10.00点
5-3-3 実施点	
B. 実施	
	9.70点
1. 一般的な技術	
	- 手具操作の技術
	- 身体の動きの技術
	- リズムの実施(音楽と動き)
2. ボーナス加点	
	0.30点
	表現力： 0.10点
	熟練度：卓抜な大きさをもつた実施 0.10点
	熟練度：欠点なしの卓抜な実施 0.10点
5-3-4 最終得点	
	構成の最終得点+実施の得点：最高 20.00点

(1998年度版採点規則より抜粋)

表8 1973年 徒手難度票

運動名	中級難度	高度難度
波動運動およびその連続	1. 1/4 転向とともに上体をひねりながら波動運動をし、平均運動。	1. 片脚を体前で曲げ、足先を膝につけた姿勢から大きく波動運動、後平均運動、さらに半回転して各種平均運動。
体を曲げる動作	2. テンポの早い波動運動後1回または2回転とび、さらに跳躍。	2. 片脚を曲げて踵の上ですわり、他の脚を後へ伸ばし、体を前へ曲げ、胸で膝に触れ、次に後へ反り上体と両腕とを床面に平行にする。
回 転	3. 片足を前に大きく出し、体後屈両手をくるぶしに触れ、徐々に反りのまま上方に重心を引き上げる。	3. 片足支持脚、片足支持脚と反対の方に2回転後、上体を深く反らす。
	4. 深く体後屈し、上体をまわしながら床面に平行に側屈。(直立、膝座にて行なう)	4. 体を深く反らせ、片足を後へ伸ばした姿勢から体前屈し、脚を半ば曲げた姿勢に移るとともに2回転後、跳躍。
	5. 体を前または横へ曲げて2回転後、2つ折の前屈。	
	6. 半ば曲げた片膝立ちで他脚を体前へ曲げ、背も曲げた姿勢で2回転後、平均運動。	
	7. 螺旋状回転3回以上の後、深く側屈運動。	
	8. 片脚を振り上げ、1回転、直ちに反対方向に2回転。	
	9. 支持していない方の脚の位置を換えて同じ回転。第1回転では脚を後へ伸ばし、第2、第3回では、これを体前に曲げながら連続回転。(テンポを変える)	

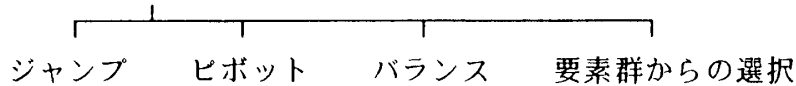
(1973年度版採点規則より抜粋)

表9 1990年 徒手の動きの選択および左手の難度

1. 4 つ目の高級難度についての徒手の動きは、以下のいずれか、演技者の自由選択に委ねられる。
- ・ 3つの諸要素群とは別のグループに属するもの。
  - ・ 諸要素の組み合わせ。
- 1 つのまとまりを形成し、中間にステップを入れずに連続して実施される 2 つ以上の中級難度は 1 つの高級難度と見なされる。

- 例：
- ・ 中級レベルのジャンプの 2 回連続。
  - ・ 中級レベルのジャンプを 1 つ行い、すぐに(着地した脚で)中級レベルのピボットを行う。
  - ・ 中級レベルのジャンプを 1 つ行い、すぐに(着地した脚で)中級レベルのバランスを行う。
  - ・ 中級レベルのピボットを 1 つ行い、すぐに(支持脚を替えず)中級レベルのバランスを行う。
  - ・ 3つの必須な諸要素群の 1 つに属する要素で、必須の難度にすでに使用されたものとは違う要素。

高級難度



減点：高級難度の実施において、徒手の必須の要素群を入れなかった場合、1 つにつき 0.30 点。

- (注) 1. ある構成が 4 つの高級難度を含み、そのうちの 1 つに徒手の 3 必須要素群の 1 つが使用されていない場合には、上記のように 0.30 点の減点となるが、難度の数としては足りていると見なされる。
2. もし高級難度が 1 つ欠けている場合には(それが必須徒手要素群を含む 3 高級難度の 1 つであろうと、選択できる高級難度であろうと)、減点は「高級難度の欠落」により 0.60 点である。
- 4) 8 個の難度は構成中に平均して配分されていなくてはならない。

減点：不均衡な配分については 0.20 点

2. 左手の難度

左手の難度として数えられるのは、左手で始めて左手で終わった場合の動きである。

- 1) ボール、輪、リボンの演技については、4 高級難度のうち、1 つは左手で実施されなくてはならない。

減点：左手での高級難度が欠けた場合、0.30 点。

- (注) 構成が 4 つの高級難度を含む場合には、難度の数としては十分と認められる。
- 義務づけられた左手の高級難度の他に、演技中での左手と右手の動きのバランスはとれていなくてはならない。

減点：左手と右手の動きのバランスが悪い場合、0.20 点

(1990年度版採点規則より抜粋)

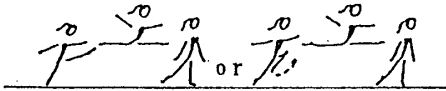
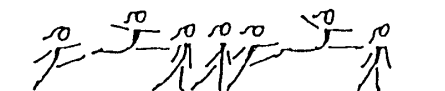
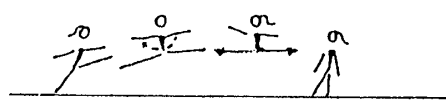
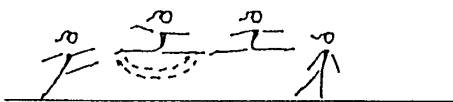




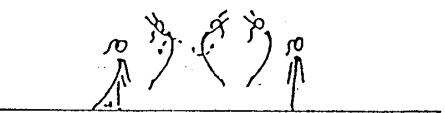
中級難度	高級難度
<p>Iジャンプ</p> <p>1. 開脚跳び</p> 	<p>Iジャンプ</p> <p>1. 中間にステップを入れないで2以上連続の開脚跳び。</p> 
<p>2.</p>	<p>2. 空中で半回転(またはそれ以上)をする開脚跳び。</p> 
<p>3.</p>	<p>3. 脚を替えての開脚跳び。</p> 
<p>4. 鹿跳び</p> 	<p>4. 中間にステップを入れない2回以上連続の鹿跳び。</p> 
<p>5. 反り跳び</p> 	<p>5. 中間にステップを入れない2回以上連続の反り跳び。</p> 
<p>6.</p>	<p>6. 空中で半回転をする反り跳び。</p> 

図1 ジャンプの難易度 (1990年度版 採点規則より抜粋)

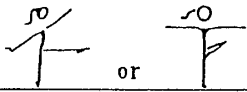
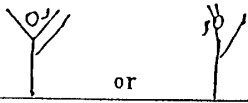
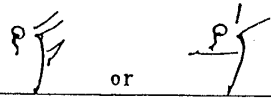
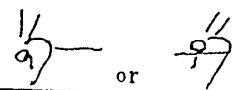
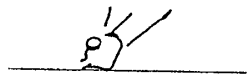

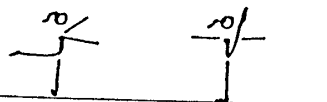

中 級 難 度	高 級 難 度
<p><u>IIバランス</u>                      バランスはポーズでの明らかな停止がなくてはならない。                      1. さまざまな姿勢での、片脚を水平面に上げた爪先バランス。</p> 	<p><u>IIバランス</u>                      バランスはポーズでの明らかな持続がなくてはならない。                      1. さまざまな姿勢での、片脚を頭まで上げた爪先バランス。</p> 
<p>2. 胸の背面屈を伴う爪先バランス。</p> 	<p>2. 胸の大きな背面屈をし、さまざまな姿勢で片脚を水平に伸ばした爪先バランス。</p> 
<p>3.</p>	<p>3. 片脚を前方に上げ、胸の大きな背面屈をしながら片膝でバランスを取る。(手での支持なしに)</p> 
<p>4.</p>	<p>4. 片脚を後方に上げ、胸の大きな背面屈をしながら片膝でバランスを取る。(手での支持なしに)</p> 
<p>5. 空いている片脚を水平に上げての爪先バランス、および空いている片脚をほとんど垂直にまで上げての片脚支持のバランス。</p> 	<p>5. 空いている片脚をほとんど垂直にまで上げての爪先立ちのバランス。</p> 

図2 バランスの難易度 (1990年度版 採点規則より抜粋)


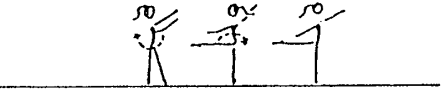

中級難度	高級難度
<p>3. 胸の動きを伴うピボット(360)。</p> 	<p>3. 胸の動きを伴うダブル・ピボット(720度)。</p> 
<p>4. ピボット(360度)を行いながら、空いているほうの脚を前方から後方(または後方から前方)へと水平面上に移動させる。</p> 	<p>4. ダブル・ピボット(720度)を行いながら、空いているほうの脚を前方から後方(または後方から前方)へと水平面上に移動させる。</p> 
<p>5. 胸の背面屈を伴うピボット。</p> 	<p>5. 胸の背面屈をしながら、空いている脚を水平に伸ばして前方から後方へと移動させながら、ピボット(360度)を行なう。</p> 
<p>6. 360度の形の違うピボットを2回、支持脚を替えながら連続して実施する。</p> 	<p>6. 360度の形の違うピボットを2回、支持脚を替えないで連続して実施する。</p> 
<p>7. 360度の連続ピボットを2回、そのつどかかとをつけて行う。</p> 	<p>7. 360度の連続ピボットを3回、そのつどかかとをつけて行う。</p> 

図3 ピボットの難易度 (1990年度版 採点規則より抜粋)

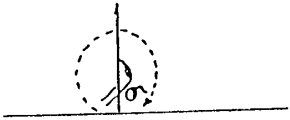


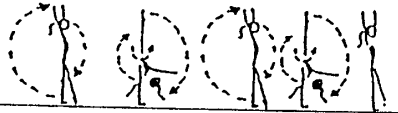
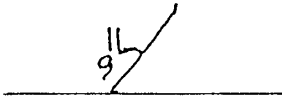
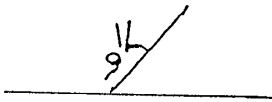
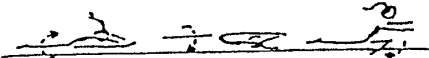

中 級 難 度	高 級 難 度
<p>4. 腕の動きを組み合わせる垂直に大開脚をしながら胸の前屈を行う。</p> 	<p>4. 幾つかの腕の動きを組み合わせる垂直(またはそれ以上)にはっきりと保持された大開脚をしながら胸の前屈を行う。</p> 
<p>5. 胸の前屈を行ないながら片脚で1回転し、空いているほうの脚は大開脚で垂直面を通す(もぐり回転)。</p> 	<p>5. 胸の前屈を行ないながら片脚で1回転し、空いているほうの脚は大開脚で垂直面を通す。 中間のステップをいれなくて繰り返す。</p> 
<p>6. 片脚支持で前方への大開脚をしながら、胸の後屈を行う。</p> 	<p>6. 爪先支持で前方への大開脚をしながら、胸の後屈を行う。</p> 
<p>7. 床に大開脚をし、胸を一方の脚に傾けて開脚のまま側転を行う。</p> 	<p>7.</p>
<p>8.</p>	<p>8. 腹這いになり、垂直(またはそれ以上)胸を上げる(胸の屈)。</p> 

図4 柔軟性の難易度 (1990年度版 採点規則より抜粋)

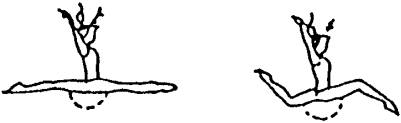



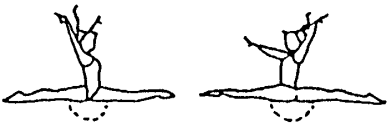
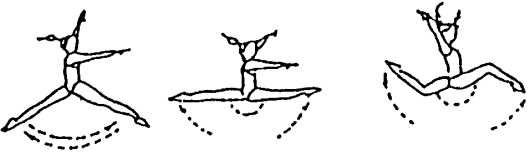
ジャンプ難度表	
4.1.1 A難度	4.1.2 B難度
<p>1. 前方または側方への開脚ジャンプ</p>  <p>Fig. 1a                      Fig. 1b</p>	<p>1. バックル・開脚ジャンプ</p>  <p>Fig. 1</p>
<p>2. 側方ジャンプ</p>  <p>Fig. 2</p>	<p>2. 胸の後屈を伴う開脚ジャンプ</p>  <p>Fig. 2</p>
	<p>3. 空中で半回転(またはそれ以上)しながらの開脚ジャンプ</p>  <p>Fig. 3</p>
	<p>4. 伸ばした脚をかかえての、または曲げた開脚ジャンプ(脚は伸ばすか曲げる)</p>  <p>Fig. 4a                      Fig. 4b</p>

図5 ジャンプの難易度 (1998年度版 採点規則より抜粋)



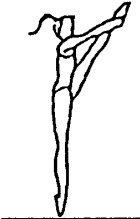



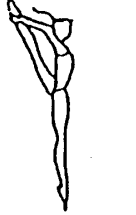

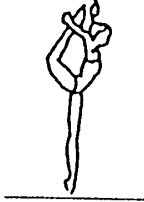

バランス難度表	
4.2.1 A 難度	4.2.2 B 難度
<p>9. 片脚は、片手、両手、または手 具を使って支える</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 9</p>	<p>2. 前方へ開脚(頭の位置)</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 2</p>
<p>10. 片脚は、片手、両手、または手 具を使って支える</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 10</p>	<p>3. 側方へ屈身(頭の位置)</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 3</p>
<p>11. 後方への開脚</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 11</p>	<p>11. 後方への開脚(頭の位置)</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 4</p>
<p>12. バックルでのバランス、上挙の 脚を手またわ手具を使って支える</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 12</p>	<p>12. バックルでのバランス(頭の位置)</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 5</p>

図6 バランスの難易度 (1998年度版 採点規則より抜粋)


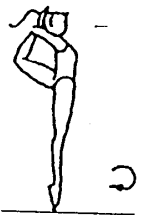

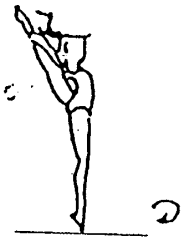
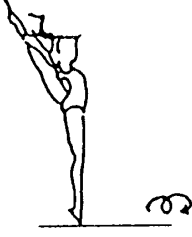
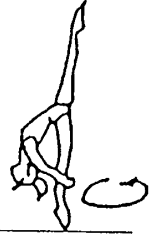
ピボット難度表	
4.3.1 A 難度	4.3.2 B 難度
	<p>16. ダブルピボット(720度)、前方または側方の開脚、手または手具の助けを借りて</p>  <p>Fig. 16</p>
<p>15. バックルピボット(360度) 片手または手具の助けを借りて</p>  <p>Fig. 15</p>	<p>17. バックルでのダブルピボット</p>  <p>Fig. 17</p>
<p>16. ピボット(360度) 手または手具の助けと共に後方に開脚して</p>  <p>Fig. 16</p>	<p>18. 後方に開脚しての720度ピボット</p>  <p>Fig. 18</p>
	<p>19. ピボット(360度)、回転の間、胴を後屈すると共に前方に開脚</p>  <p>Fig. 19</p>

図7 ピボットの難易度 (1998年度版 採点規則より抜粋)

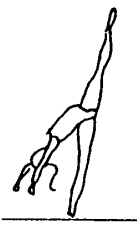

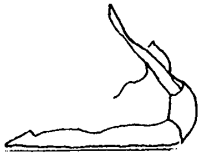
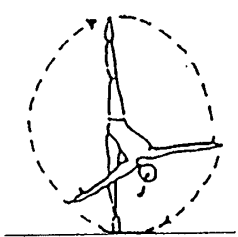
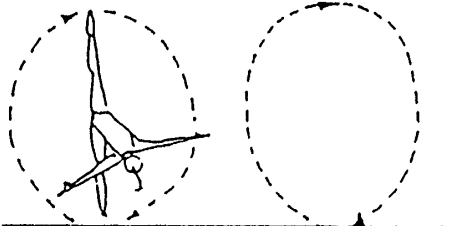

柔軟難度表	
4.4.1 A 難度	4.4.2 B 難度
	<p>6. 屈曲、前方開脚に伴う胴の後屈、爪先立ちで</p>  <p style="text-align: right;">Fig. 6</p>
<p>7. 水平面以下の後屈</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 7</p>	<p>7. 腹這いになり、背面に胴を後屈まで上げる</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 7</p>
<p>8. 片脚支持でのもぐり回転 (床に一時的に片手をついてもよい)</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 8</p>	<p>8. 2回連続もぐり回転、片脚支持で支持脚を変える(床に、身体の一部が触れることなしに)</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 8</p>
	<p>9. 胴を後屈させると共に後脚支持で身体を回旋させる〈逆イリュージョン〉</p>  <p style="text-align: center;">Fig. 9</p>

図 8 柔軟性の難易度 (1998年度版 採点規則より抜粋)

## まとめ

新体操のルーツは、1920年代ドイツを中心に、「体操改革運動」が起り、1922年、「芸術的な身体運動に関する会議で新体操の方向が確認された事にあると考えられる。それはやがてヨーロッパ諸国に普及していった。また、手具体操としてはメダウ(H.Medau)がリズム体操を学び体操の中にいろいろな手具(ボール、こん棒、なわ、タンバリン等)を持ち込み手具体操の体系化を図った。この歴史により、ヨーロッパ諸国は今も新体操が盛んであり、世界の強国を生み出した所為であろう。

日本は1946年に日本体操協会が設立され、初め団体徒手体操として行なわれていた。1968年新体操と改称し現在に至っている。1878年、体操伝習所が設立され教授のリーランド(G.A.Leland)は米国式の体操を中心に西洋遊戯、スポーツ、人体測定などを一緒に伝えた。彼の体操は亜鈴(あれい)、球竿(きゅうかん)、豆囊(とうのう)、棍棒(こんぼう)などの運動から成り立ち、軽運動、軽体操、普通体操と呼ばれた。手具を使用した運動であり、後に、学校体操の中心となる徒手体操と手具体操であった。そして1950年の第12回世界体操競技選手権大会のとき、体操競技の1種目として手具を持って演技された。

世界新体操選手権大会は第1回、1963年ブタペストで開催された。この時は個人種目のみであった。

1969年に日本の団体が参加、1971年ハバナの大会で個人総合と団体総合に初参加した。この大会で団体は5位の成績を取っている。これまでの大会ではソ連は7回ブルガリアは9回優勝している。

オリンピックは、1984年ロサンゼルス大会から個人種目のみであった。1996年アトタ大会から団体種目と個人種目の両方が行われるようになった。世界選手権大会の開催が継続されてきたこと、オリンピックの種目になった事は、新体操発展に大きな原動力となり、日本及び世界の新体操を普及発展させた。

採点規則については、1973年、1990年、1998年を比較してみた。点数配分は1973年に構成7.00実施

3.00で構成が重視されていた。1990年も、構成6.50、実施3.00でやはり構成重視であるボーナス加点0.50点に加えられたことが大きな違いとなった。これにより熟練度、独創性、リスク等の新要素が加わり、新しい方向へ発展してきた。1998年では、構成10点、実施10点と同配分となったことが大きい変化である。更に構成の中が、技術価値と芸術価値に分かれたことも大きな変化をもたらした。技術の高さ、難度も多く取り入れ、追加の難度としてボーナス加点となることになった。芸術価値の中にも、振り付けの独創性や、音楽、制御力等のボーナス加点が入った。また難度のレベルが中級、高級から、A、B、C、Dの4段階になった。これは、組み合わせや、難度の多様性を要し、高い技術価値や、運動能力による変化であろう。1973年から1998年にかけて、共通していることは、徒手の重要性である。徒手の中で、バランス、ジャンプ、ピボットが重要視されている。難度の内容の技術が高度になり、細かく明確に示され要求されてきた。この徒手が新体操にとって、不可欠の重要な要求である。したがって、徒手の能力を高め、技術力を向上していくことが必要であることがわかった。1998年には柔軟性も徒手として重要な要素となってきた。1973年、1990年、1998年を通して考えると手具操作の多様性、徒手要素の多様性が構成に変化をもたらし、芸術的価値を高める上で重要な要因であるといえる。更に手具操作と徒手要素の調和が新体操にとって重要な構成要素であることがわかった。今回新体操のルーツを知る事により、新体操には身体運動つまり徒手要素による芸術的価値観は不変であり、重要である事を確認する事が出来た。

時代を経ても採点規則が変化しても、徒手要素が失われる事はなかった。手具を持つ事で内容や芸術は発展してきたと言えよう。新体操は将来、手具の技術のみ、あるいは身体運動の技術のみを追求するのではなく、手具を伴う身体運動による芸術への方向性が強いと考えられた。今後も採点規則による変化に注目し重要な因子は何かについて、より深く研究に入っていきたい。

## 引用参考文献

- 1) 財団法人 日本体操協会 1995年 日本体操協会  
60年史 「体操と体操家の語源」  
P11・P12・P14・P83 山陽印刷株式会社
- 2) 岸野 雄三著 1959年 体育の文化史「生活に  
まで浸透した美意識」P66 不昧堂
- 3) 岸野 雄三 1987年 最新スポーツ大辞典  
P448 大修館書店
- 4) T.S.リシツカヤ著 1995年 ソ連の新体操 新体  
操の歴史展望P12 不昧堂
- 5) 遠山 喜一郎著 1995年 日本体操協会60年史  
「自然運動の祖、藤村トヨ」
- 6) 財団法人 日本体操協会 (1973年度版) 新体操規  
則集の採点規則
- 7) 財団法人 日本体操協会 (1990年度版) 新体操女  
子規則の採点規則
- 8) 財団法人 日本体操協会 (1998年度版) 新体操女  
子規則の採点規則

## 図表の出典

- 表1～表5 / FIG (国際体操連盟)  
ブリテンに基づき、執筆者作成
- 表6 表7-1～3 / 1973年度版、1990年度版、  
1998年度版の採点規則
- 表8 / 1973年度版採点規則
- 表9 / 1990年度版採点規則
- 図1～4 / 1990年度版採点規則
- 図5～8 / 1998年度版採点規則